くまにち論壇

慶応大大学院教授
蟹江 憲史

かにえ・のりちか　専門は国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs（持続可能な開発目標）」など。52歳。

熊本地震

持続可能な未来へのヒント

私が2年間担当してきた「くまにち論壇」は今回で一区切りとなる。私自身と熊本とのつながりを振り返りながら、これから先の世界を考えてみたい。

これまでも当欄で触れたように、父が御船町出身であった私は熊本に何度も足を運んできた。自分自身は東京生まれの東京育ちだが、熊本という〝ふるさと〟を持ち、東京とは違う環境に幼いころから親しんでこれたのは、ありがたいことだった。

家族で訪れることが多かったが、父の熊本出張に同伴して祖父母や親戚の家へ遊びに行くこともあった。父は熊本に帰ると「…なかとね」や「ばってん…」とネイティブの熊本弁を操った。そのイントネーションや言葉遣いが面白く、ケラケラと笑ったことを思い出す。タクシーの運転手さんと親しげに話すのも印象的で、東京ではほとんど見せない父の様子に田舎の良さを感じた。

初めての一人旅は中学時代。道中は日ごろ読めないマンガ雑誌を買って読み、自由を満喫したが、市電の終点で出迎えてくれた叔父の姿に思わず涙があふれた。祖父母と訪れたアユのやな場は、自然に触れながら食を味わえた。後に自分の子どもも連れて行った大好きな場所である。

高校や大学で陸上競技に打ち込むようになると、熊本での大会にも出場した。祖母が握ったおにぎりを携えて御船からバスを乗り継ぎ、会場に着くころにはそれだけで疲れてしまう気がした。ただ、その行程は都会との違いを実感する時間でもあった。山道を走りながら「こんなところでいつも練習できれば速くなりそうだな」と、熊本出身ランナーの強さの源を実感したものだ。

そして、多くの観光地も巡り、熊本のことはなんとなく分かったような気になっていた。しかし、水越のホタルの里を初めて訪れたのは、私が子どもを連れて御船に来るようになってからだ。あれほどのホタルが舞う様子を見たことも初めてで、まだまだ知らないことがたくさんあるのだと思い知らされた。澄んだ水と自然の存在に圧倒され、その中で生きることの大切さを改めて感じた。

2016年4月、法事で親戚が熊本に集まり、会食をした。熊本城の桜が咲き誇ったころである。それから間もなく、城の石垣が崩れ落ちる大地震が熊本を襲うとは思ってもみなかった。

御船町の被害も大きかった。震災から2カ月後、父の実家を訪れた時は衝撃を受けた。幼いころから通り慣れた道が崩れ、周囲の家々が倒壊していた。日本は災害が多い国だとは理解していたし、被災地を訪れることはそれまでにもあった。だが、親しい土地での震災は、あらためて心に重くのしかかってきた。

実家自体は崩れ落ちてはいなかったが、仏壇や家具、冷蔵庫などがことごとく倒れていて、悪臭も漂っていた。お墓に行くと、墓石が倒れ、骨壺（こつつぼ）も割れてしまっていた。

父は多くを語らず、母と家の整理を進めていたが、思うところはいろいろとあったはずだ。その後、先祖代々の土地や家は売却し、お墓も現在の家の近くに移すこととなった。父は昨年他界した。大学病院に献体し、遺骨はやがて新たな墓に納骨することになる。

こうして振り返ると、私は熊本との関係を通じて、豊かな人生を送るために必要なことを具体的に教えてもらったと思う。多様な風景が広がる日本各地にさまざまな人々の暮らしがあること、自然と人間が適切な関係を保つ大切さ、田舎と都会のあり方、震災による生活の変化など、枚挙にいとまがない。

住んでしまうと、その良さを感じられないこともあると思う。しかし、コロナ禍を経て持続可能な未来を考えたとき、むしろ求められているのは、そこにある「豊かさ」をどう保ち続けていくかということではないだろうか。

SDGs（持続可能な開発目標）は、達成できなければ世界が崩壊してしまう大事な目標だ。しかし、決して難しいことを言っているわけではない。熊本という〝ふるさと〟が伝えているように、足元の豊かさの中にこそ、持続可能な未来を見いだすヒントがあるはずである。